

『一心千里』

走っていいれば、

見えてくる

永田 隆一



第3回

今年の冬に、東大阪市で産声をあげた人工衛星が打ち上げられました。

東大阪の人工衛星「まいど一号」の発起人は、東大阪にあるアオキの社長、青木豊彦さんであります。今年ご縁がございまして、京都でお食事を一緒にさせていただきました。私より一回り上の西年の六四歳であります。大きな手で、力強い握手が心に残る方です。

印象に強く残った話が二つあります

お父上が鉄工所の初代社長でして、母上からいつも「ええか豊彦、お父ちゃんみたいになるんだよ」と子供のころから言われ続けられたのだそうです。高度成長に突き進んでいた、かつての日本の力強いバックボーンを垣間見た気がしました。かたや、私の友人がこぼします。「お父さんみたいには決してなっていないけませんよと、妻が子供たちに諭しているのを聞

《政権交代》
さて、政権与党が交代しました。自民党は、日本

の繁栄は日本の企業が元気になることと軸足を定め、企業への支援に軸足を置いてきました。企業が元気になることで、雇用を生み出し、利益を上げることともに、納税を最大化するという戦略でありました。かたや

に胸を張ってもらいたかった。最初は、飛行機を造るから、紆余曲折を経て人工衛星に繋がったのです。そして、多くの方々は、青木さん、夢を打ち上げられたのですねと言われますが、それはまったく違うのです。死に物狂いで、あの人工衛星を私達は、夢で打ち上げたのです。覚悟と気概に圧倒された私は、久しぶりにおおいに、元気をいただきました。

民主党は、内需拡大のために、企業ではなく、国民一人一人の支援に軸足を移しました。国民が安心して生活をでき、余裕を持てれば消費も拡大するし、出生率も上がるという戦略です。論理的に可能性は充分あります。しかし、これは、国家の浮沈を賭けた壮大な博打(ばくち)であります。しかも、結果を出せることを担保できるものは、まったくございません。来年の参議院選挙までに

具体的な結果を出すことができないければ、野に下って大いに反省した自民党が復活し、日本という国体を大いに盛り上げていただくのも「ありだな」と、軸足がまったく定まらない思考が堂々巡りをしてしまいます。

《前向きな楽観主義》
辛いことを辛いと感じないことがあります。スポーツが良い例です。厳しい練習をして、監督に「ありがとうございませ

す」で練習を終えます。子育ても大変です。風邪を引いた幼子の看病を

様から喜んでもらうことができて、儲けさせてもらうことまでができる。坂道様々や。坂道に感謝せないかんで」

《支離滅裂な思考》
人工衛星に始まり、政権交代へ逸れ、近江商人の坂道への感謝へ飛び、支離滅裂な文脈になってしまいました。

先月、京都の半導体メーカーのFさんと朝の五時まで祇園でお酒を飲みました。Fさんと私の間に現役の祇園の芸妓さんをはさんで三人でバーのカウンタに座りお酒を飲んでいました

夢を打ち上げるんじゃない

夢で打ち上げるんだ

「もついやなのです」
「えっ、何が？」
「恋をして苦しむことが……」

して、寝不足で疲れきった親は、子供の寝顔を見て「本当にありがとう、よくぞ私達の子供に生まれてきてくれたね」と微笑むものであります。要は「こころの持ちよう」なのであります。前向きな楽観主義とい

「Fさん、あの装置の搬入日は、二週間遅らせてください」
「ああ、いいよ、そのかわり引き渡し日は二週間前倒ししてや」(毎月掲載)